

「もっとウキを知りたい～基本を覚えて使い分けよう～ウキ戦術～」

「もっとウキを知りたい～基本を覚えて使い分けよう～ウキ戦術」も最終回を迎える。

最後にあたって、ウキのメンテナンス方法と「尽心作」の製作者である北村滋朗氏の考える「良いウキとは？」という疑問に答えてもらう。

最終回 ウキのメンテナンスと「良いウキ」とは？

はじめに

今回を持って、1年5カ月間の連載を終える。

まだ解説していない「ウキのメンテナンス」と、連載を終えるにあたって「良いウキとは？」という命題に持論を展開していきたい。

Aという釣り人にとっては良いウキであるが、Bという釣り人にとっては、そのウキは良いウキではないかもしれない。Cという釣り人にとっては、オモリ負荷量が最重要かもしれないが、Dという釣り人にとっては、トップの視認性が最重要かもしれない。

釣り人の好みといってしまうとそれまでではあるが、万人の納得いく基準というものは無いのかもしれない

釣行後のメンテナンス

皆様は、釣行後にヘラウキの手入れをされているでしょうか。納竿後、穂先、穂持ちを拭くと、池の水面の水汚れがベトベトとくっつくことがある。ヘラウキも同じ状態なのである。是非、釣行後に真水でウキを洗ってあげていただきたい。また、釣りを始める前に、重曹を使ってトップとボディをこすっている。タバコの灰を使用する方も多いのだが、タバコの灰は効果絶大である反面、トップの蛍光塗料まで剥がしてしまうことがある。

重曹は、タバコの灰ほど効果はないが、あまり蛍光塗料を剥がすことなく、同様の効果を得ることができる。心理的にも、折角美しく仕上げたウキを黒いタバコの灰でゴシゴシとこすりたくないというのが本音である。

トップの塗り替え

ヘラウキは竹竿と同じで、手入れさえしっかりすれば、半永久的に使用できると思いますし、また、そうでなければならぬと考えている。

しかしながら、トップの蛍光塗料の「くすみ」は、竹竿における胴ウルシと同じで、何年かに1回はリペイントしてやる必要がある。

名の通った作者であれば、釣具店やインターネットを通じて受け付けてくれるはずである。

トップの取り換え

トップの交換についても、名の通った作者であれば、釣具店やインターネットを通じて受け付けてくれるはずである。

市販のウキの多くは、ボディの塗りが終了した後に、トップを装着している。

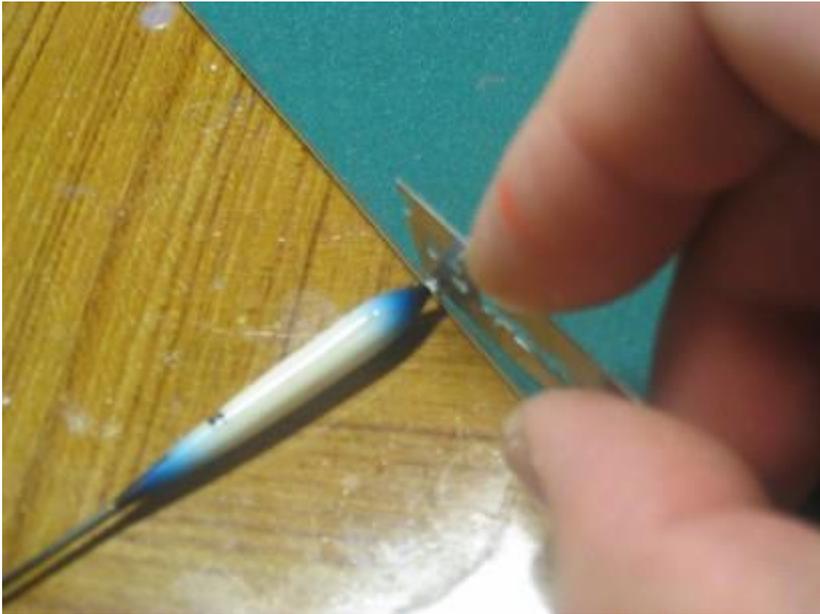
ボディの塗りが終了した後に、トップを装着する利点は、①生産性が向上する。②トップを破損した場合に取替えが簡単である。欠点は、①段ができるため、仕上がりの美しさに欠ける。

トップを装着してから、塗りを行う利点は、①仕上がりが美しい。欠点は、①トップを破損した場合の取替えに技術を要する。

「尽心作 匠」では、仕上がりの美しさを優先しているため、トップを装着してから、塗りを行っている。



キャプション：チョーチン釣りでは、竿先でトップを叩いてしまい、上記画像のように、トップを破損してしまうことがあります。



キャプション：ボディとトップの間のスキの部分にカミソリを入れ、トップをまわします。



キャプション：今度は、トップの縦方向から、カミソリの刃をいれていきます。最初は4つ割り、さらには8つ割りにして、ソリッドアダプタを傷つけないように、慎重にトップを剥がしていきます。



キャプション：ソリッドアダプタに新しいトップを装着します。

良いウキとは？

戸田覚氏が2007年3月号の「ヘラブナ釣り改造計画」で、「良いウキとはどんなウキか？」と疑問を投げかけている。また、同じく2009年6月でも「明確な基準なきウキづくりの世界」と題して、基準なきウキ作りに疑問を呈されている。

誤解がれば申し訳ないが、氏は「良いウキ」とは「ちゃんと作ってあるウキ」として、定義されている。

あくまで私見であるが、「尽心作」の目指す「良いウキとは」誰にでも使いやすいウキではないかと考える。

特にウキはトータルバランスの始点になることから、ウキ交換をスムーズに行える機能を備えていることが特に重要ではないかと考えている。

「ヘラウキにおけるユーザーフレンドリー性」という点で、「尽心作」では以下のようなことを実施している。

(1) オモリ負荷量の表示

「尽心作」では、全 Type において、0.01g の単位でオモリ負荷量をボディに明示している。



(2) 標準オモリ負荷量

「尽心作」では、タイプ・番手毎に標準オモリ負荷量を定め、0.02gの範囲でオモリ負荷量を統一している。具体的に言えば、Type-Dの5番（ボディ50mm）は、標準オモリ負荷量が0.68gであることから、0.66gで0.70gにオモリ負荷量になるように心がけている。

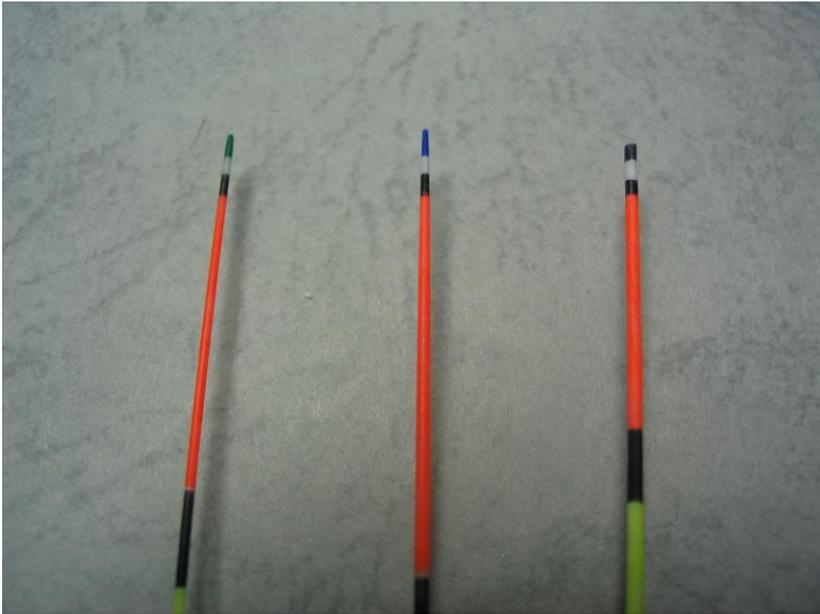
特にトーナメントでは、ウキを損失して、同じ番手に取り換えてもエサ落ち目盛が一緒になることが要求されている。

素材にかなりのバラツキのある孔雀の羽根やカヤにおいて、上記を実現するのは高度な技術と素材の徹底的な選別が必要である。

まだまだ製作技術が未熟であり至らない点も多いことから、すべての作品がそうならないが、上記誤差の範囲内でオモリ負荷量が統一できるよう努力している。

(3) トップの素材の明示

「尽心作」では、写真のようにトップ先端を塗り分けることにより、トップの素材がひと目でわかるようにしている。具体的には、パイプトップ=黒、PCムク=グリーン、グラスソリッドムク=青に塗り分けている。



(4) 用途の明示

「尽心作」では、ボディ裏面に **Type** を明示し、どの釣法向けに製作されたウキかを明示している。

(5) 足の差込径の統一

「尽心作」では、ウキを交換した際にウキゴムがフィットしないということを回避するために、足先端部の径を1.2mmに統一している。

(6) 使用説明書の添付

Web サイト上で各 **Type** の仕様を明示し、使用説明書をダウンロードできるようにしている。使用説明書では、エサ落ち目盛の設定や標準的な使い方を解説している。

最後に

1年5か月間、16回に渡って、「もっとウキを知りたいー基本を覚えて使い分けようー」ということで、持論を展開してきたが、これで一区切りにしたいと思う。

ウキはエサと並んで、ヘラブナ釣りにおいて、釣果を左右する重要なファクターのひとつである。

エサに流行があるように、ウキにも流行がある。また、地方性もある。

最近では、管理池におけるヘラブナの大型化とガサベラ化が進み、またパワー系がきかなくなってきた等、釣法は日進月歩で変化してきている。

ウキ製作においても、この流れに敏感に反応することが、釣果をアップにつながると信じている。

自作ウキの素晴らしさは、自分の釣りスタイルにあったウキを製作できるという点にある。

ウキ作りについては、私の Web サイト「ヘラウキ尽心工房ー匠の世界へようこそー」

(<http://www.geocities.jp/jsyhg851/>)

で、詳しく解説しているので、ご覧いただくと幸いです。
1年5カ月間に渡り、おつきあいただき、本当にありがとうございました。

以上

(追伸)

ウキに関する言葉の定義

過去の連載と一部重複する部分があるが、ウキに関する言葉の定義について、再整理したい。

(1) ウキが早く立つ

ヘラウキに関する雑誌やブログ等で、「ウキが早く立つ」という言葉がよく見られる。私の考えでは、これには2つの概念があって、筆者の方それぞれが、2つの異なる概念をひとつの「ウキが早く立つ」という言葉を使われていることから、混乱がおきているように感じている。

具体的には、

概念1

オモリが高い位置（落下途中の早い段階）でウキが立ち始める。

この場合、ウキが立ち始めてから、直立するまでは遅くなる。

具体的には、浅ダナ用で、ボディが小さくて、足が長いタイプである。

このタイプは、主に活性が低く、ゆっくりと落下させ、広くタナを探るイメージとなる。

概念2

ウキが立ち始めてから、直立するまでが早い、俗にウキがシャキと立つと言われるもの。

具体的には、浅ダナ用で、足が短いタイプである。

このタイプは、主に活性が高く、できるだけ早く落下させ、タナを凝縮させるイメージとなる。

「ウキが早く立つ」ではなく、概念1は「ウキが立ち始めるのが早い」、概念2は「ウキが直立するまでの時間が早い」と、言葉を使い分けるべきと考えている。

(2) FW比

ウキの性能を表すひとつの目安として、オモリ負荷量（浮力）÷自重、この数値をFW比と呼ぶことを提唱したい。

(3) なじみ幅とストローク

「トップのなじみ幅」と「トップのストローク」という言葉の使い分けについて、質問を受けた。

トップのなじみ幅：エサ落ち目盛から、エサの重さによりトップが沈む幅

トップのストローク：トップの付け根から、最終的にトップが沈む幅、つまり、トップの付け根からエサ落ち目盛+エサの重さによりトップが沈む幅

と定義したい。